

[担当教員] 所属研究室教員 (主に末包伸吾(教授) 槻橋修(教授) 浅井保(助教))

開講年次：博士課程前期過程1年生第1クォーター

■課題概要

私はここ数年、千葉県鴨川市の山側にある棚田集落に通い、里山再生に取り組んできました。きっかけは2019年の台風被害。友人の家のトタン屋根が豪風で吹き飛び、中から出てきた茅葺屋根を葺き替えることを旗印に、茅場の再生や耕作放棄地での米作り、人が入らなくなって久しい森林の整備を始めました。さらに、空き家になった古民家を仲間と共同購入し、コミュニティキッチンや簡易宿所として改修。都市住民も気楽に里山の活動に参加できる都市農村交流の拠点としてきました。コロナ禍での移動制限中も、バブル方式で安全を確保しながら毎週末のように研究室の学生たちと集落に通い、土、草、樹木、材木など、向き合う相手(資源)に合わせて道具を持ち替え、自らの身体性を発見し、里山の一部に少しずつつながってきました。生命力と幸福感に溢れたこうした体験は、1.身の回りの環境を、2.道具を手にして、3.自らの身体を投じて、4.資源化しながら整える、5.仲間がいる、という条件によって支えられていると私は考えます。スキルを介した資源へのアクセシビリティとメンバーシップといえは commons の原理です。しかし、所有と資本を疑わない現代社会では、農村であれ都市であれ、分断が進む一方です。そこで今回の設計競技では、こうした commons 再構築の提案を求めます。農村でも都市でも構いません。まだまだ利用されていない資源(解体される建物、ゴミ、古い衣服、太陽、雨、土など)は都市にもあります。すでに応募者自身で行っている具体的な取り組みでも構いません。将来像を含めたドローイングや模型などで建築的提案として表現してください。建築の、そして我々人間の未来のあり方を開く刺激的な審査会と展示を、2024年の日本建築学会大会で開催できることを楽しみにしています。

■条件

実在の場所(計画対象)を設定すること。

■提出物

下記1点もしくは2点を提出すること。

a. 計画案の PDF ファイル<必須>

以下の①~④を A2 サイズ(420x594mm)2枚に収めた後、A3 サイズ2枚に縮小した PDF ファイル。なお、使用する言語は、日本語または英語とすること。(解像度は 350dpi を保持し、容量は合計 20MB 以内とする。PDF ファイルは 1 枚目が 1 ページ目、2 枚目が 2 ページ目となるように作成する。A2 サイズ 1 枚にはまとめないこと。)模型写真等を自由に組み合わせ、わかりやすく表現すること。

- ① 設定した計画対象地を具体的に示すこと
② 設計主旨(文字サイズは 10 ポイント以上を目安とし、日本語の場合は約 600 字以内、英語の場合は約 300Word 以内の文章にまとめる)
③ 計画条件・計画対象の現状(図や写真等を用いてよい)
④ 各種ドローイング

b. 顔写真の JPG ファイル<希望者のみ>

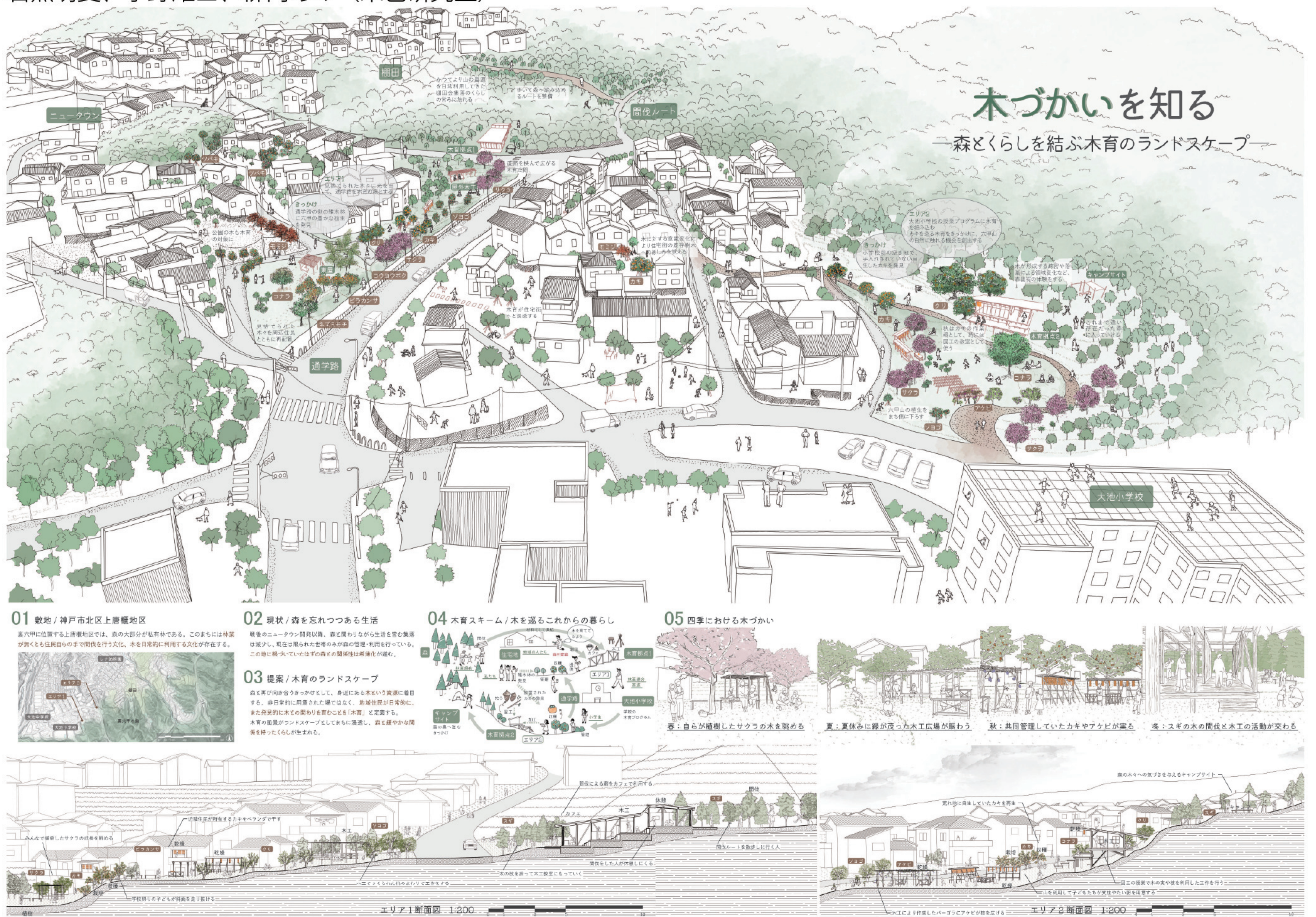
代表者および共同制作者のうち、掲載を希望する者の顔が写っているもの 1 枚に限る。なお、サイズは横 4cm x 縦 3cm 以内で、容量は 20MB 以内とする。

\*以上の文章は日本建築学会 HP

(https://www.aij.or.jp/jpn/symposium/2024/24ssk\_compe.pdf) から引用

木づかいを知るー森とくらしを結ぶ木育のランドスケープー

石黒萌夏、宇野耀士、柳内あみ(末包研究室)



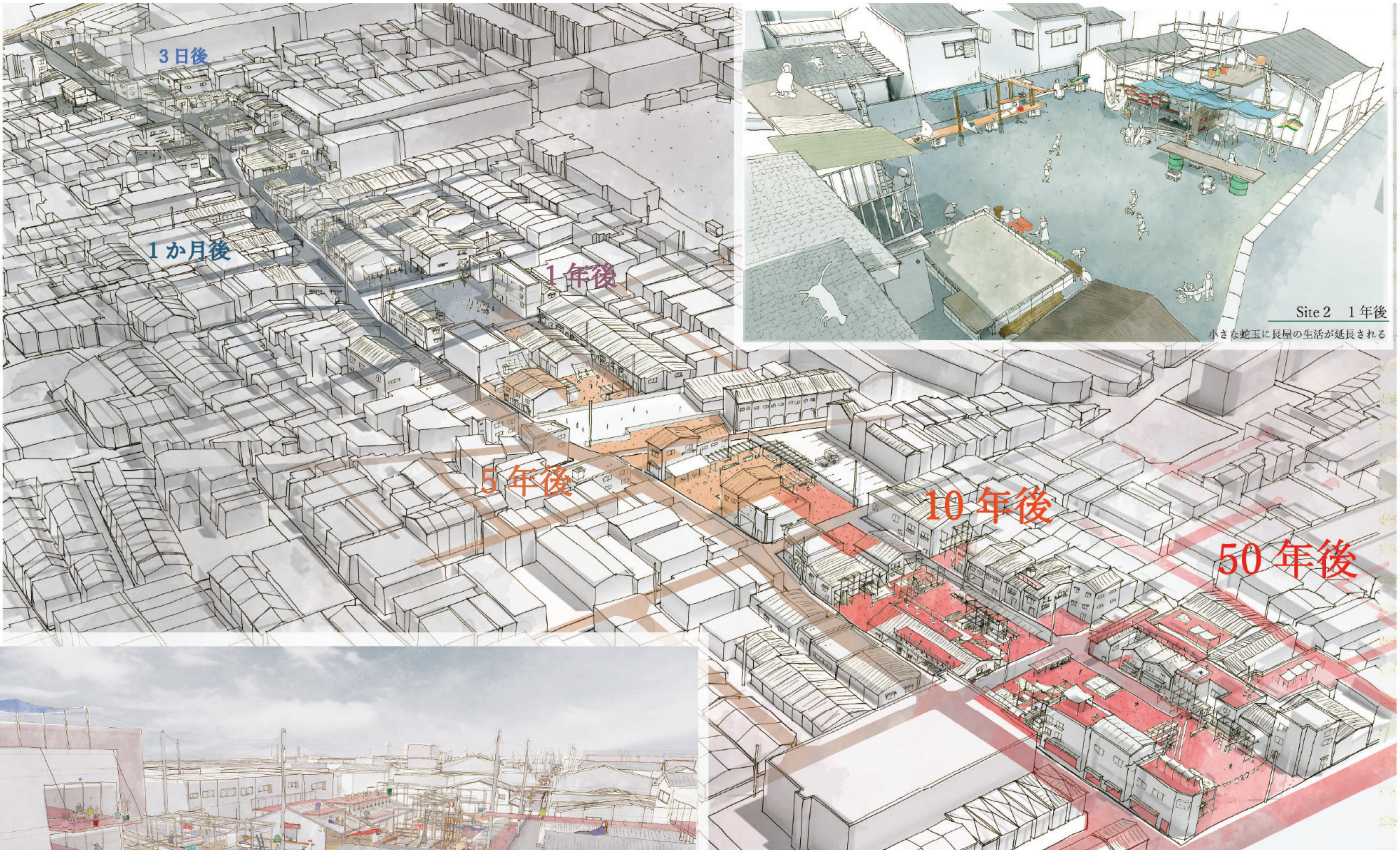
# 蛇玉を巡る物語 —西成区千本地区の野生による蛇玉コモンズ—

大内崇弘、丁子紘亘（末包研究室）

戦前より続く木造密集エリアでは、住戸単位が狭く生活水準が低いことから、路地などの共有による豊かな生活を育んできた。次々と現れる蛇玉を住民の生活の場として使いこなし、再資源化する。その過程で培われる人間同士の繋がりや、蛇玉の広がりによって衰退する街の未来を描く。

## 蛇玉を巡る物語

—西成区千本地区の野性による蛇玉コモンズ—

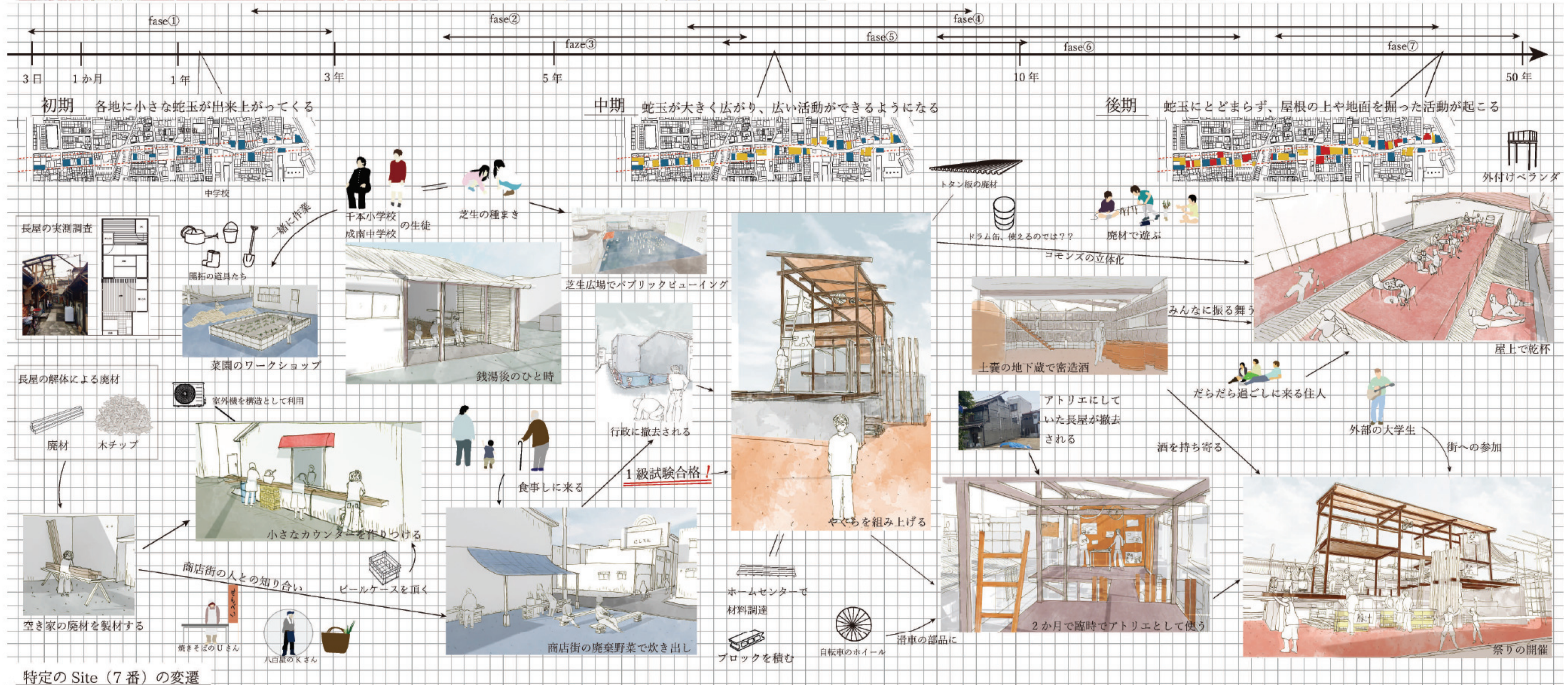


01. 敷地 —大阪府西成区千本地区—

■ 木造住宅密集地の「野性」  
 大阪市西成区の千本地区は、戦前より続く木造密集エリアである。長屋や文化住宅といった狭い環境が生活水準を低下させる反面、路地などの空間を自ら開拓し、「野性」にも使いこなし、「野性」による暮らしの向上が各地で見られた。

02. 提案 —蛇玉の再資源化による人々と街の連関—

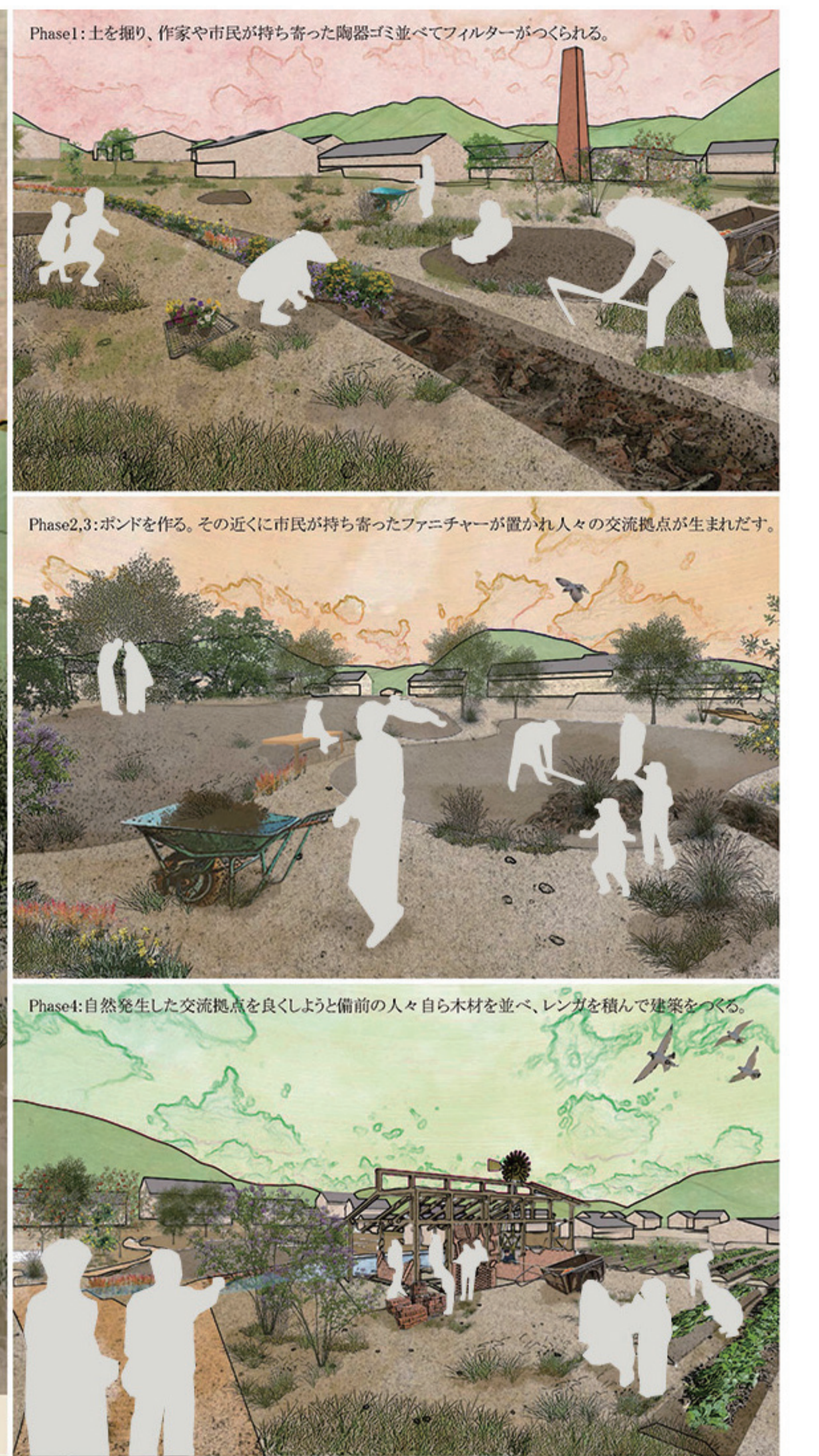
木造密集エリアでは、住戸単位が狭く生活水準が低いことから、路地などの共有による豊かな生活を育んできた。次々と現れる蛇玉を住民の生活の場として使いこなし、再資源化する。その過程で培われる人間同士の繋がりや、蛇玉の広がりによって衰退する街の未来を描く。



# 縁環ノ景 - 消えゆく備前焼、今と向き合い未来の備前を紡ぐ -

泉貴広、岩田真奈、山口沙礼 (槻橋研究室)

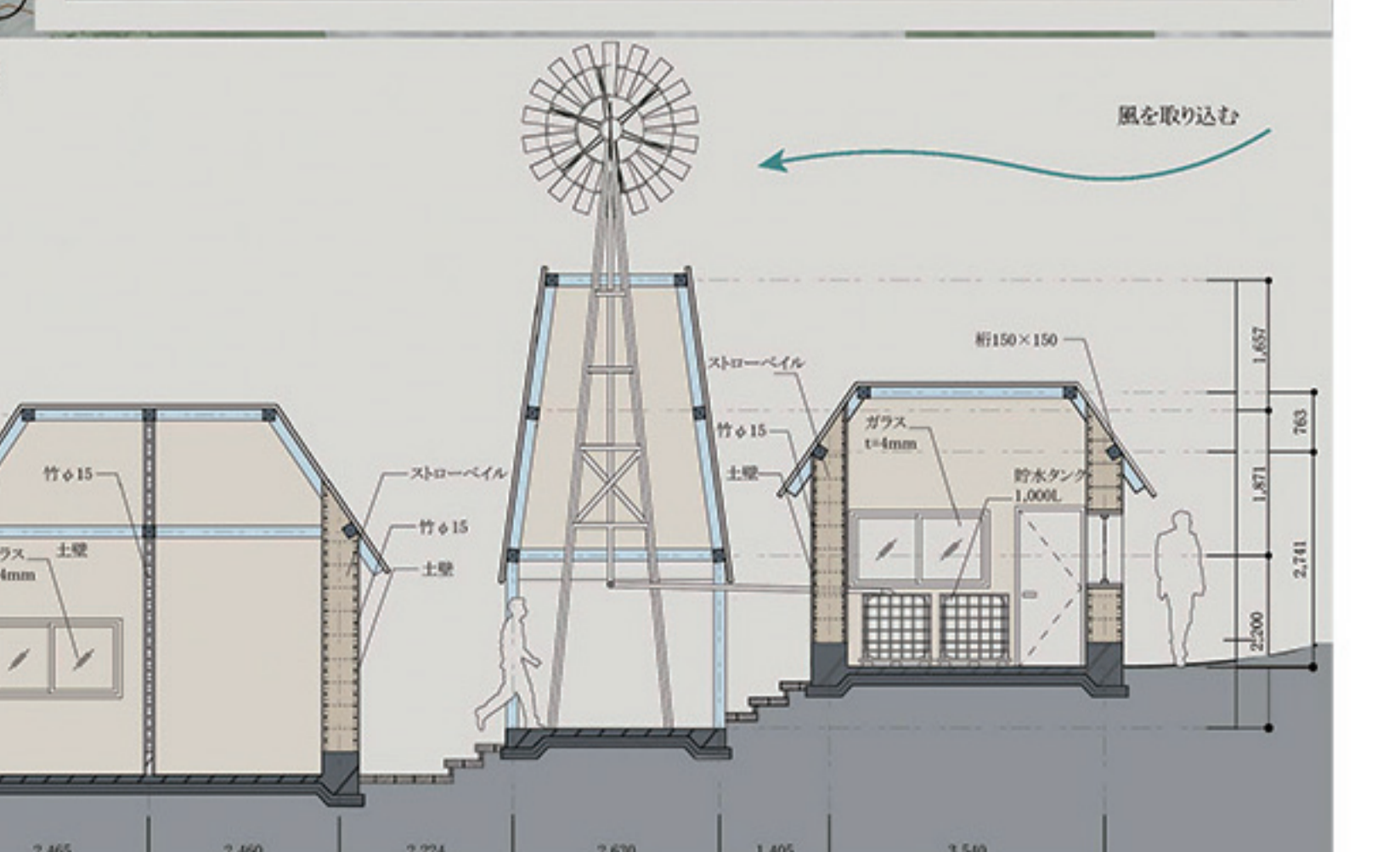
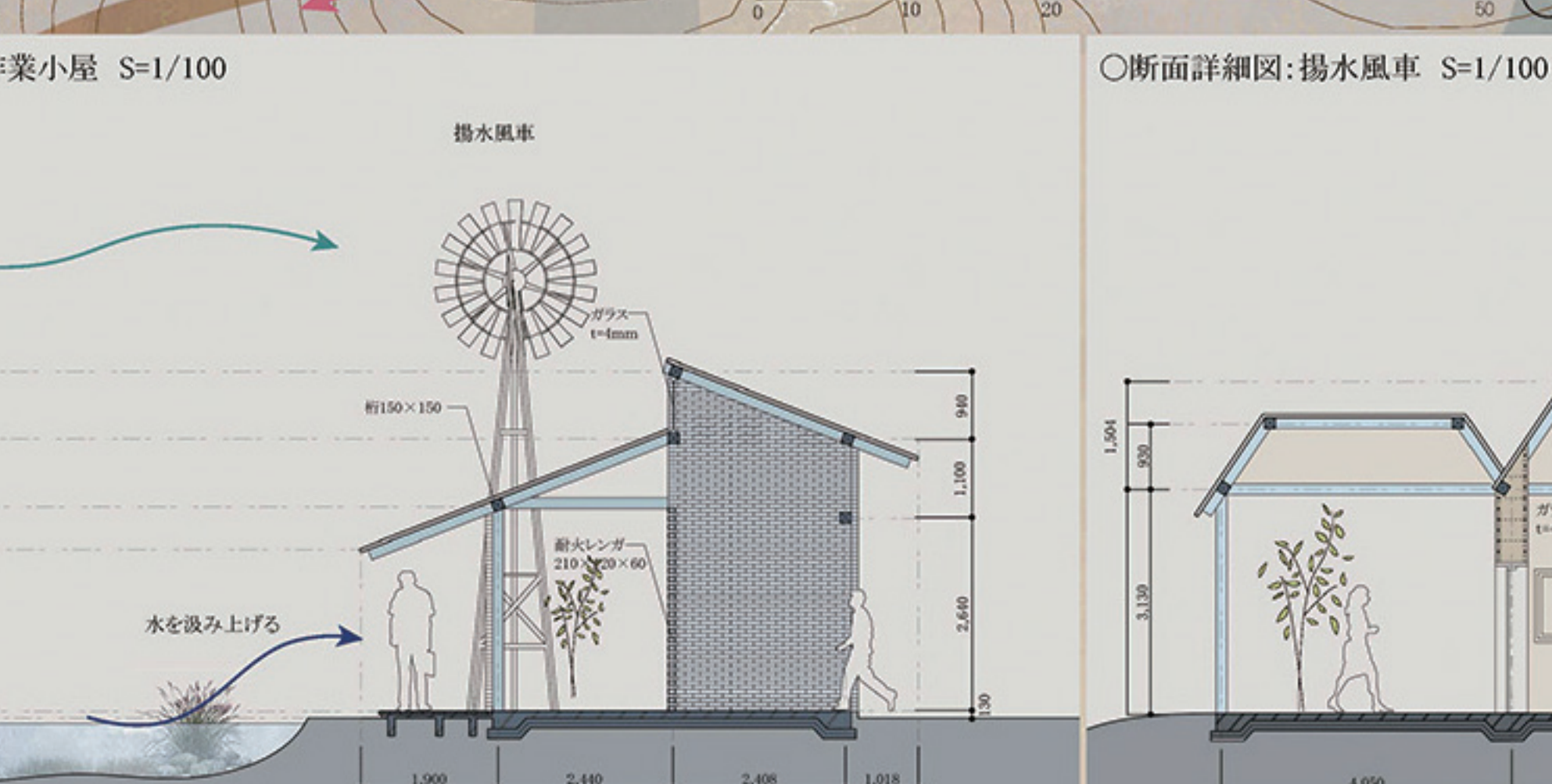
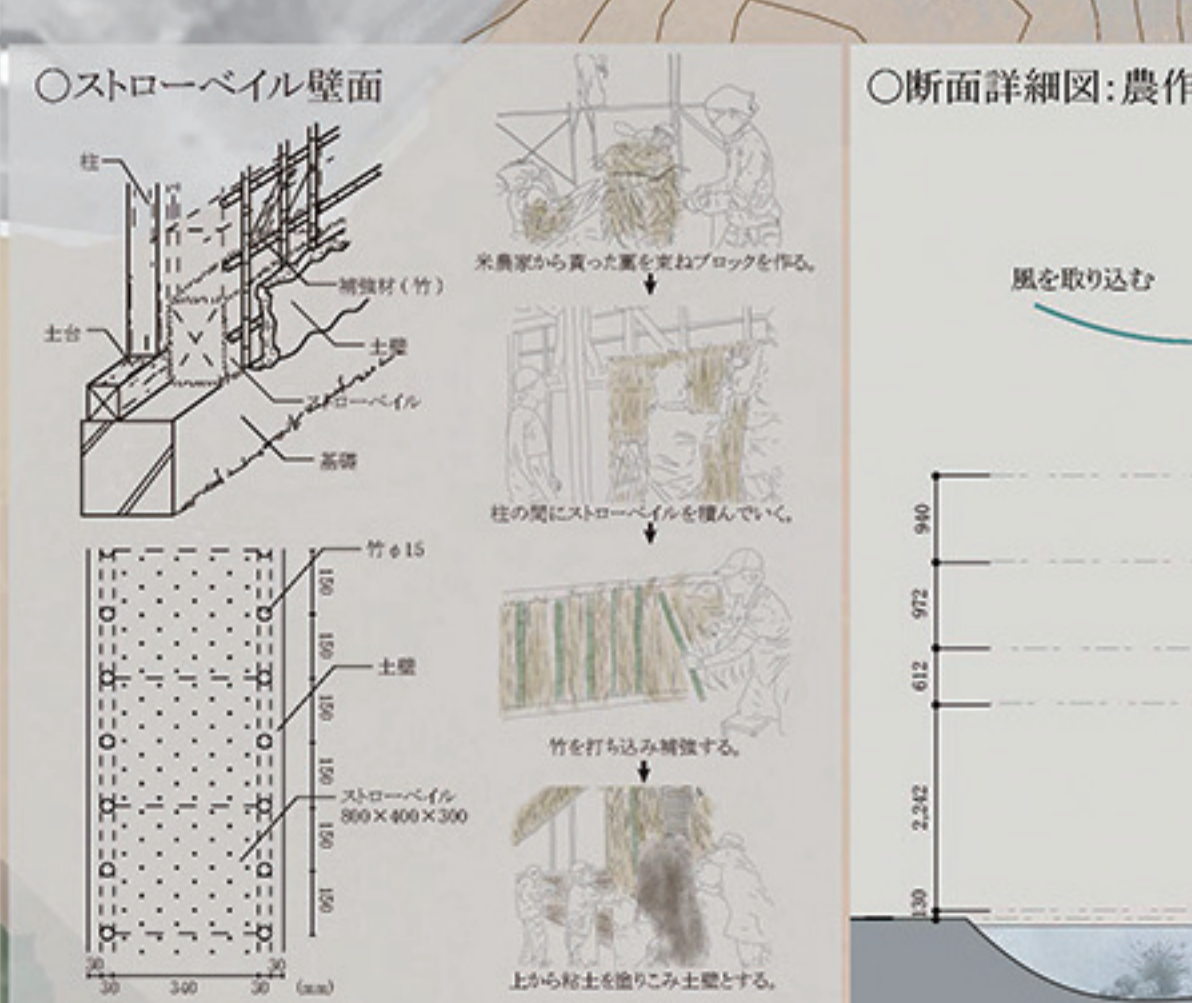
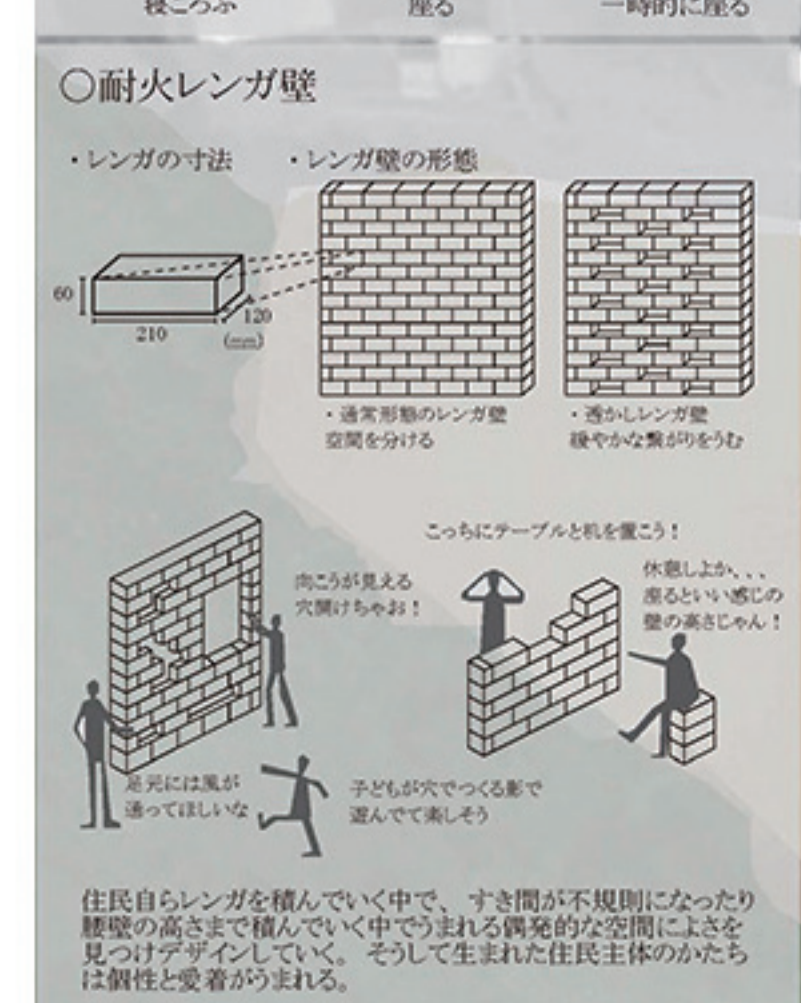
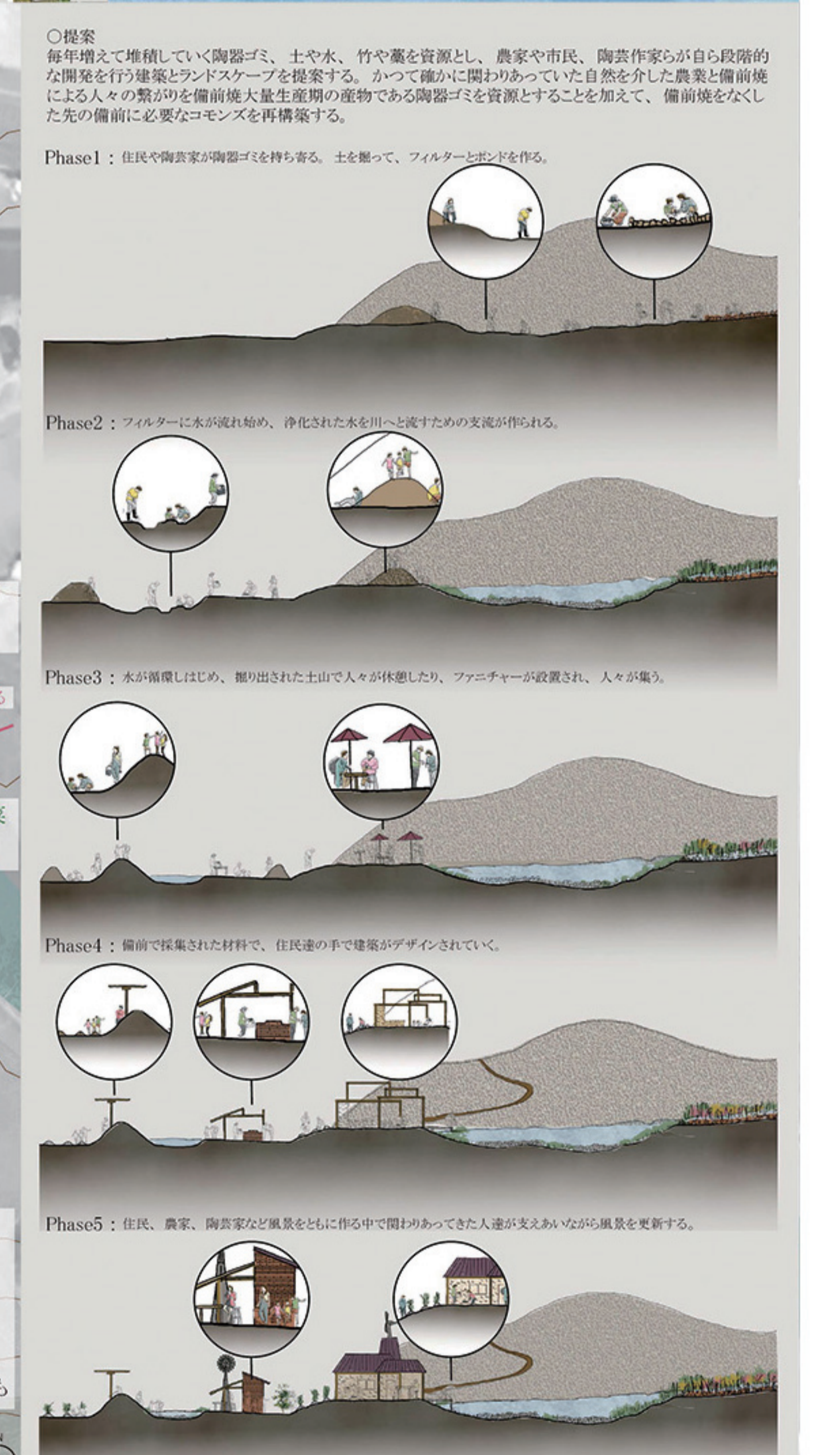
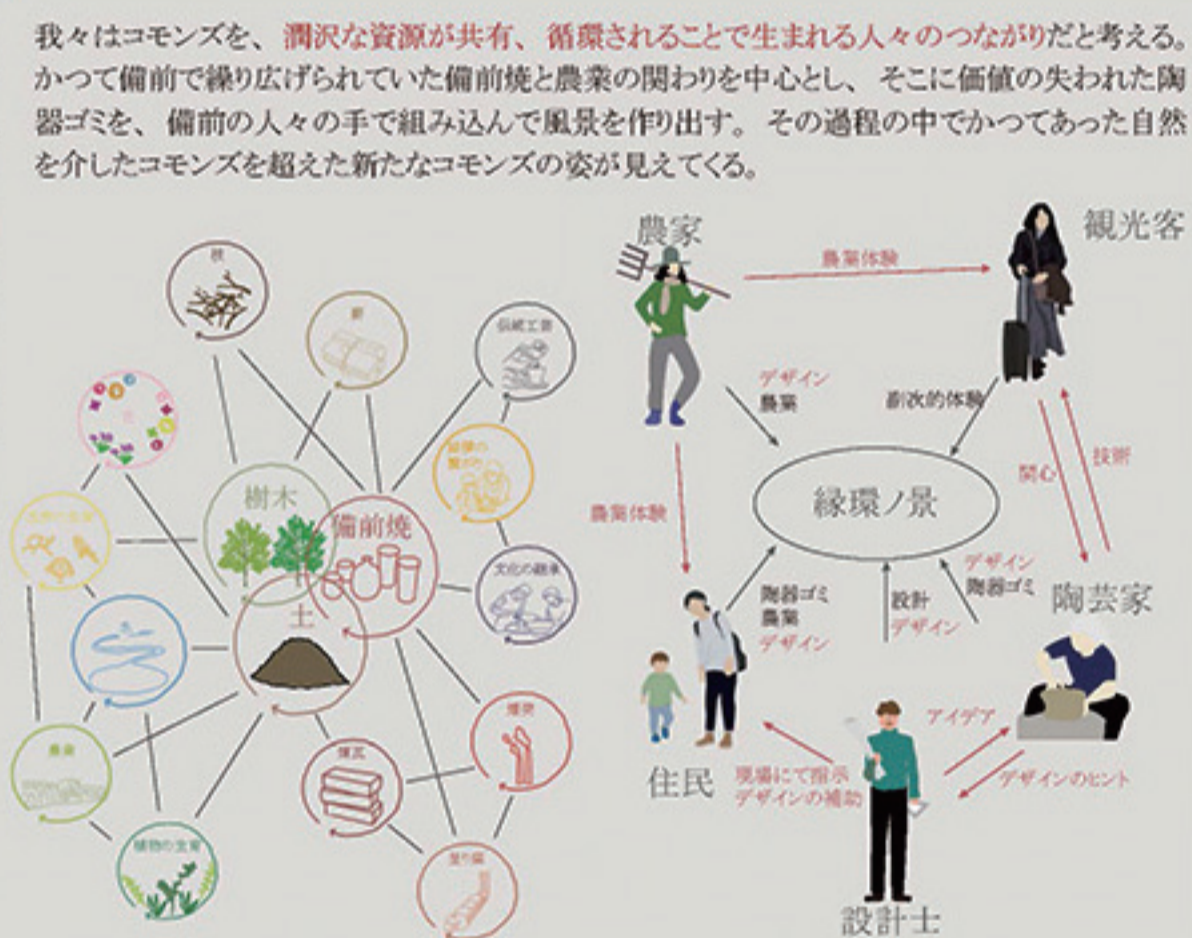
備前市と備前焼の未来を描く。ここでは役割を失った備前焼陶器ゴミが資源となって循環することで地域に豊かな自然資源をもたらす。住民、作家、農家と観光客らが垣根を越えて、かつての大量生産によって失われた資源と負の遺産に備前の人々が向き合い、循環するランドスケープを開発する中で生まれたコモンズは、備前焼を取り巻く範囲を自然まで広げて持続的に繁栄していく。いつか備前焼がこの地からなくなっても備前焼が姿を変えたランドスケープが生活と共にあるのである。



備前の課題 敷地 岡山県備前市伊部 コモンズ

**○田土の枯渇とそれに伴う農業 × 備前焼コミュニティの乖離**  
田んぼの下に堆積している田土(ひよせ)を上質な土として扱っている。その土はほとんど掘りつくしてしまい、備前焼の未来には心配が見えてしまっている。かつて農業と陶器は土を介して繋がって来たが、今ではその繋がりは薄れていく一方である。自然素材のみで作られる備前焼は、農業と自然の間に備前焼という土産品を生み出した。市内には山田などの自然の中に馴染んだ備前焼の風景があり、農業とのかかわり合いは新社会の規模で存在しはしない。

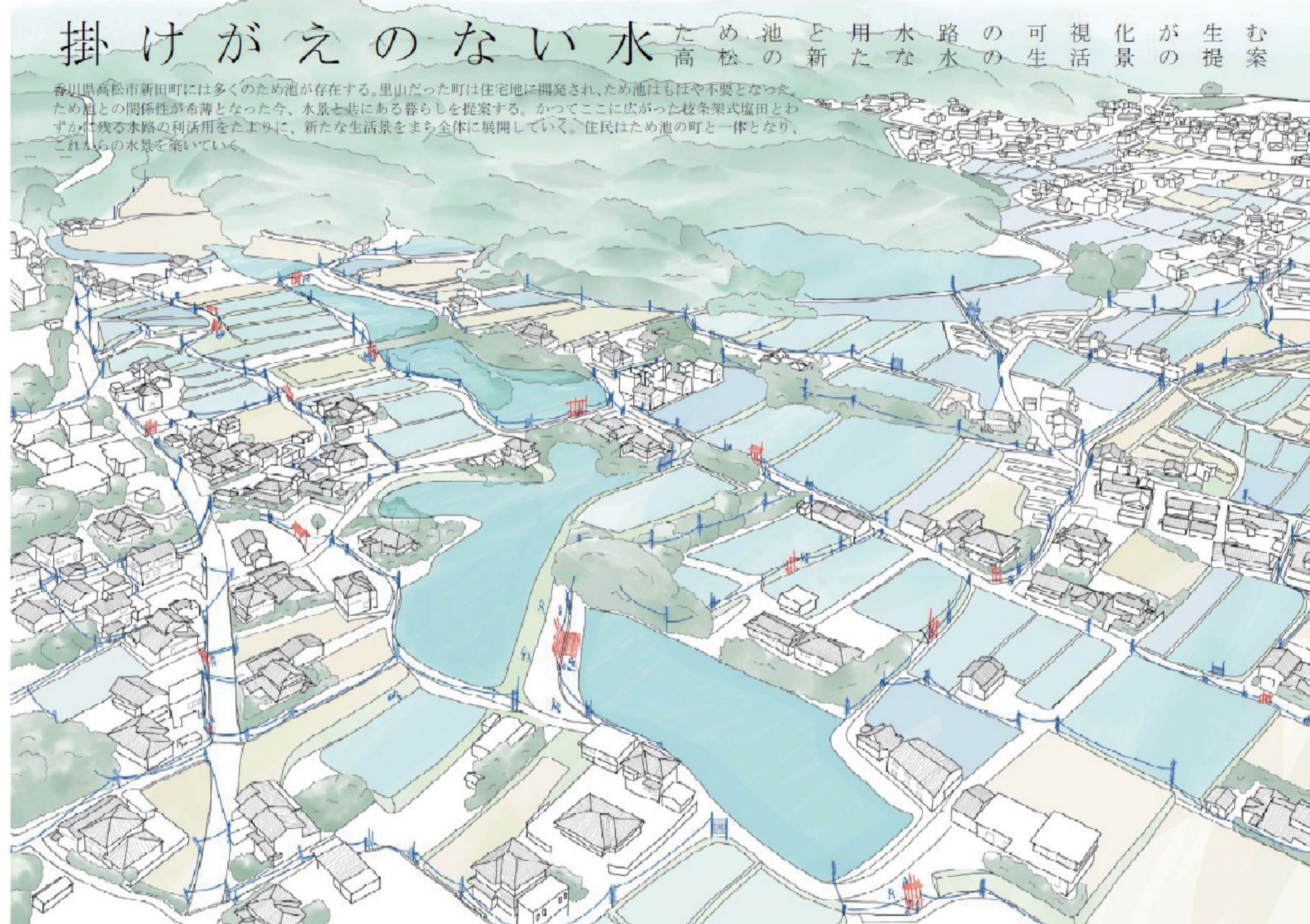
**○大量の陶器ゴミとそれが放置される物原**  
毎年、作られる備前焼の1-2割は陶器ゴミとなり廃棄される。土で作られた陶器が焼く前は土を介して繋がって来たが、永遠に堆積してしまふ。また、深層には物原と呼ばれる陶器ゴミの放置地帯がある。歴史的価値があるという認識が一般的だが、物原には1950年代に再び注目を集めた備前焼全体が商業的側面を強め、土の枯渇につながった負の遺産としての側面を持つと考え。近年はその現状を変えようと自然由来の素材を用いている点から再生事業の注目が集まっているが住民全体を巻き込んだ規模では行われていない。



# 掛けがえのない水 — ため池と用水路の可視化が生む高松の新たな水の生活景の提案 —

安藤陸都 千馬生吹 金谷百音 (槻橋研究室)

香川県高松市新田町には多くのため池が存在する。里山だった町は住宅地に開発され、ため池はもはや不要となった。ため池との関係性が希薄となった今、水景と共に暮らすを提案する。かつてここに広がった枝条架式塩田とわずかに残る水路の利活用をたよりに、新たな風景をまち全体に展開していく。住民はため池の町と一体となり、これからの水景を築いていく。



## 03 設計手法 生活景の用水路へ

### a. 地域的な用水路の生活景



### b. 浄化装置としての枝条架



枝条架の裏を用いた塩田浄化機構を浄化装置として転用する。枝条架に水を流すことで、農業用水だったため池の水を生活用水に浄化する。

### c. ため池の水量を視す



ため池の水量は一年を通して変化する。水位変化は用水路の水量にも現れ、用水路がため池の水量と季節を知らせる指標となる。

### d. 『掛かり合い』の空間



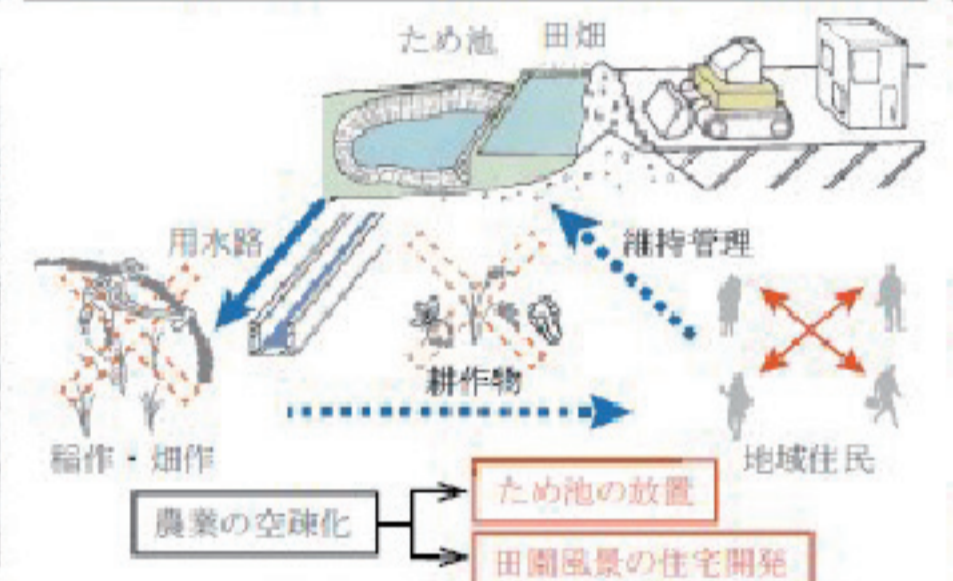
枝条架がまちのネットワークを可視化し、枝条架から派生したいくつかの拠点が地域的な用水路の生活景をまち全体に展開していく。住民はため池や用水路と掛かり合った新たな暮らしを築き、ため池のまちと一体となる。

## 00 背景 香川県の原風景



香川県高松市には多くのため池が存在する。香川県特有の架橋と地形のため起こる水不足に備えるために作られてきた。かいはりにはかつてのため池の清掃活動である。冬に池の水を抜き、底に溜まった土や落ち葉、魚に触れる。これにより土地と住民は結びついてきた。

## 01 課題 変わる地域形態



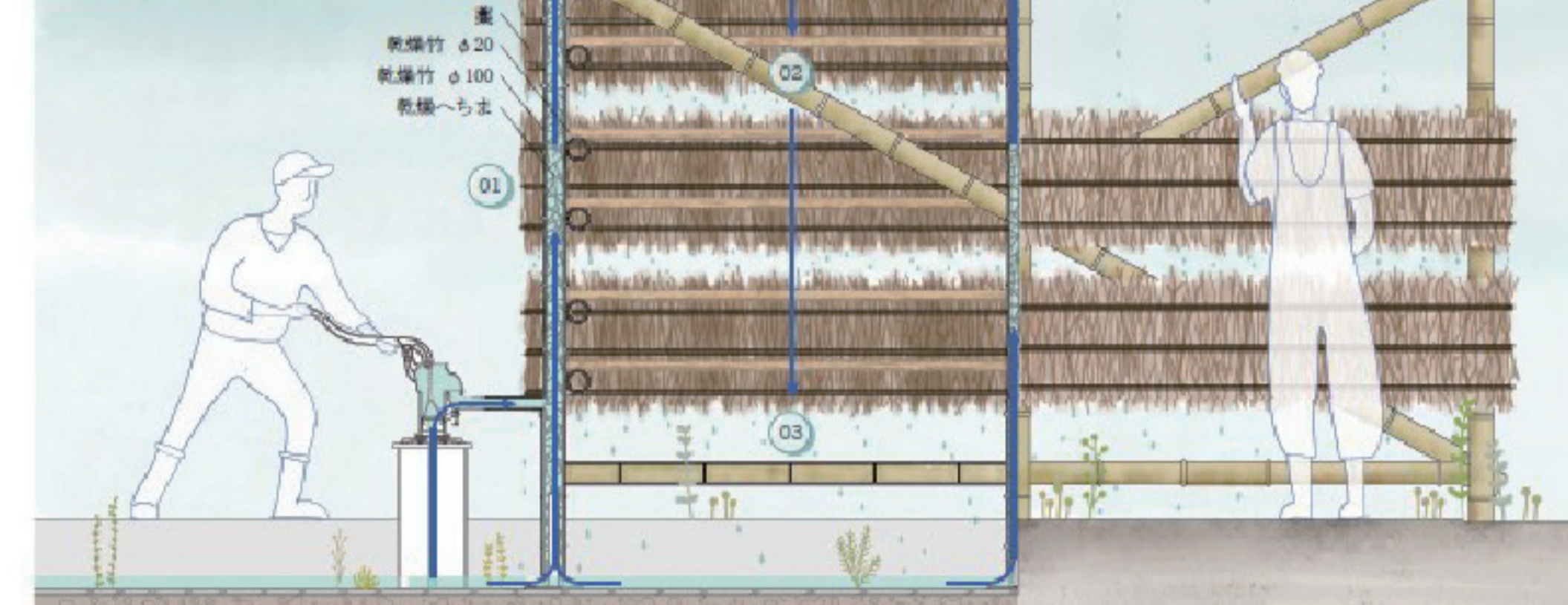
農業密着化の結果、池の水は不要となりため池は放棄され、田圃風景は住宅地へ変わりつつある。高松市では管理されないため池と用水路のみが残されている。

## 02 コンセプト 『掛かり合い』のコンモンズ



移り行くため池のまちには土地と住民同士がお互いに関係を持ち、助け合い、繋がり合う『掛かり合い』が重要である。土地と住民が掛かり合うため、残された用水路を土地と住民を結びつけるネットワークと捉え、活性化させる。用水路は住宅地で親水空間を作り、掛かり合いの場をつくる。

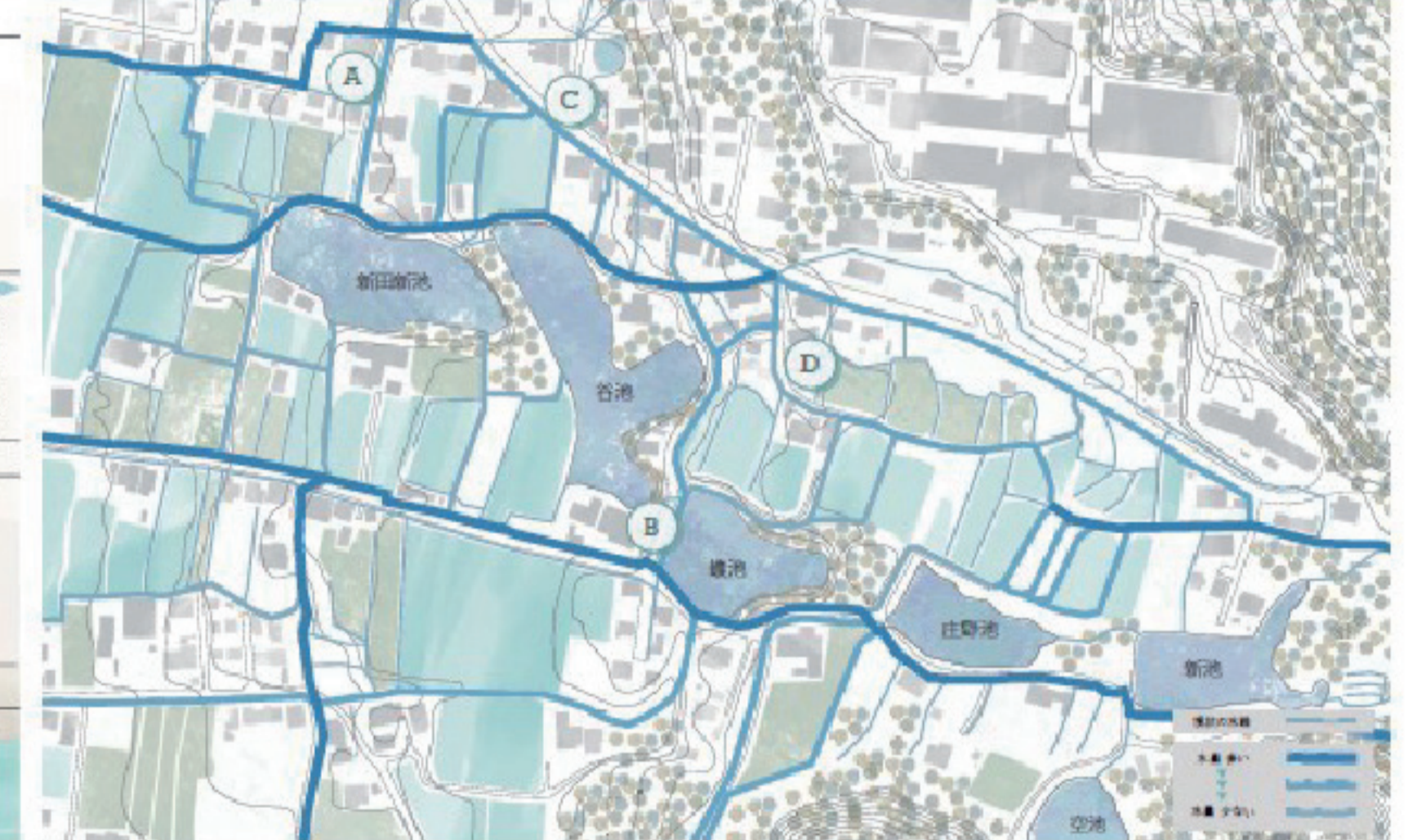
## 水路の可視化



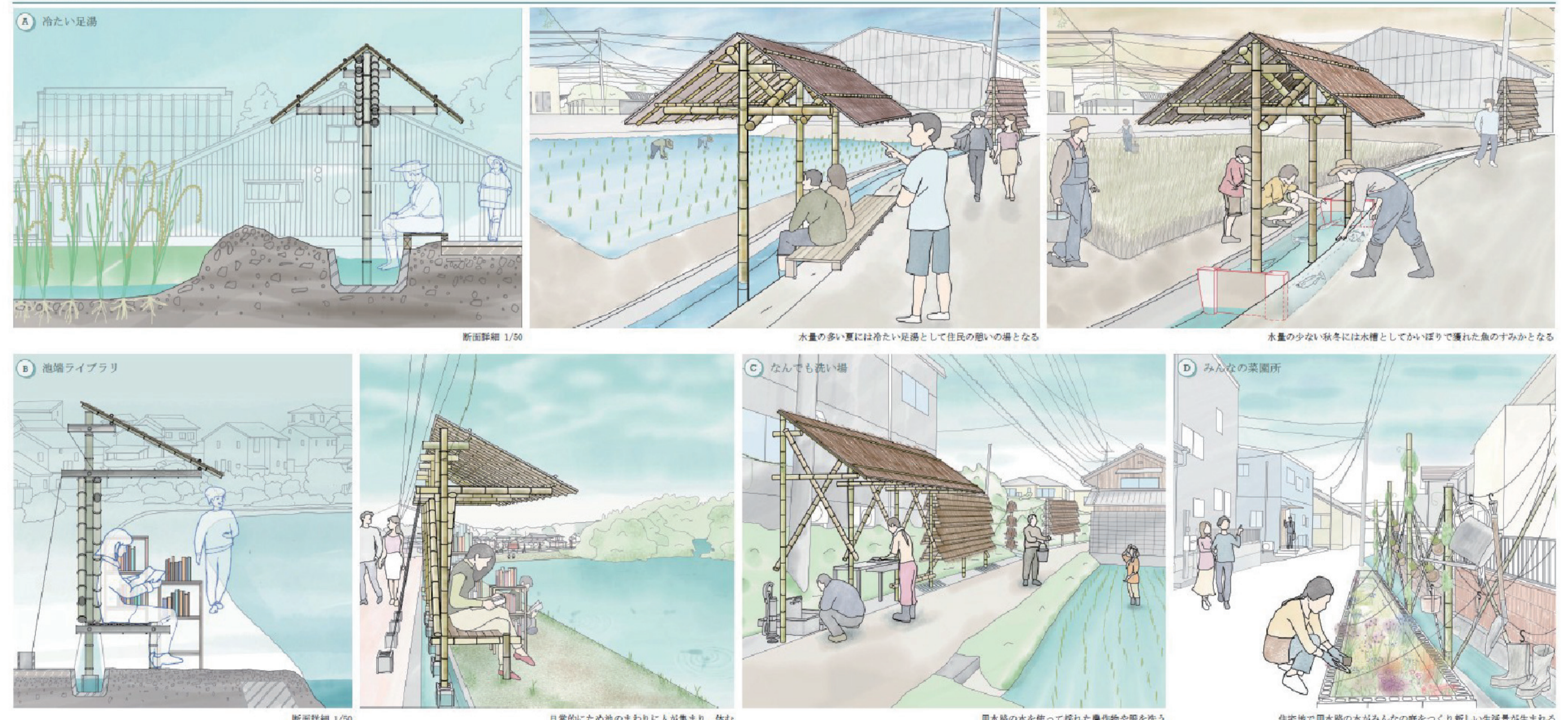
浄化システム  
 01 毛細管現象やポンプを用いて水路から水を引き上げる  
 02 枝条架式塩田で用いられる不純物農産物機構を利用して水を浄化する  
 03 浄化された水が再び水路へ戻る  
 04 断全体の水量が上昇し、暮らしの中で利用される。

## 水量の可視化

	深さ 30cm	深さ 50cm	深さ 100cm
水路の形状	全体の 32% 下流側に多い	全体の 19% 中流側に多い	全体の 49% 上流側に多い
長さ		ため池に近づくにつれて長くなる	
高さ		水量に応じて高さが変化する	



## ため池と用水路まわりに広がる新たな暮らし



# 大連自在中心 - ボイラーハウスから広がる、団地とキャンパスの屋外コモンズ

延近佑澄 中岡和貴 長谷川晶穂 XUE XIAOYI (槻橋研究室)

中国遼寧省大連市では団地に住む中高年層の屋外活動が公共空間に溢れていた。「国の土地である屋外空間」を「わたしのもの」として資源化する人々とそのつながりを屋外コモンズと定義する。そうしたコモンズは急速に成長する都市の中で失われつつある。かつて団地と大学キャンパスに一体的な熱供給を行っていたボイラーハウスに着目し、「場」、「人」、「生活インフラ」の3つの視点から、気ままに豊かなふるまいを再構築する。

### 大連自在中心

ボイラーハウスから広がる、団地とキャンパスの屋外コモンズ

中国遼寧省大連市では団地に住む中高年層の屋外活動が公共空間に溢れていた。「国の土地である屋外空間」を「わたしのもの」として資源化する人々とそのつながりを屋外コモンズと定義する。そうしたコモンズは急速に成長する都市の中で失われつつある。かつて団地と大学キャンパスに一体的な熱供給を行っていたボイラーハウスに着目し、「場」、「人」、「生活インフラ」の3つの視点から、気ままに豊かなふるまいを再構築する。

### I 大連市に溢れる屋外コモンズ

中国遼寧省大連市 都市化が進む中山、西崗、沙河口、青島子の4区を調査

1950-90年の大連

中国北部に建てられたソビエトに代表される集中工業生産体制の労働者の集合住宅団地は、その個人スペースの狭小から、住民の積極的な屋外活動を誘発してきた。

現在の大連

大連市を歩いて見つけたのは、私的な活動が公共スペースにあふれていること。「国の土地である屋外空間」を「わたしのもの」として資源化する人々とそのつながりを屋外コモンズと定義する。大連市特有の屋外コモンズの風景であると感じた。こうした屋外活動は「団地」の近くで多く見られる。

### II 屋外活動の調査

屋外活動の中にある「暮らし」と「ビジネス」

調査を行う中で見られた屋外活動を二つの分類、年齢ごとの傾向を分析した。中高年層は若い世代と比較して、消費行為（昼食や飲み物など）を本格的な生活行為（読書、散歩など）が多量に含む傾向がある。消費行為の屋外活動に例えると、屋外活動の目的は50%がビジネス（消費行為）であった。

年齢と見て見逃された屋外活動の種類

年齢層	消費行為	本格的な生活行為	会合行為	健康増進行為	その他行為
10代	飲食・飲み物	読書	散歩	読書	読書
20代	飲食・飲み物	読書	散歩	読書	読書
30代	飲食・飲み物	読書	散歩	読書	読書
40代	飲食・飲み物	読書	散歩	読書	読書
50代	飲食・飲み物	読書	散歩	読書	読書
60代	飲食・飲み物	読書	散歩	読書	読書

1200メートル以内で消費行為 47% (↑55人 ↓48人)

1800メートル以内で消費行為 38% (↑56人 ↓39人)

↑ ビジネスをする人 ↓ ビジネスをしない人 (2024年5月 北陽地区でビジュアル調査より)

### III 問題提起 失われる屋外コモンズ

1. 急速な経済発展と都市開発

急速な都市開発により、古い団地は新しい環境の大きな団地やその他の建物に更新される。調査を通じて、新しい団地はコミュニティにならなほど、屋外での自由な活動は見られなくなった。都市更新の中で屋外空間のつながりや文化は失われつつあるのではない。

2. 世代を越えない屋外活動

大連特有の屋外活動は若い世代で盛んな生活を送る中高年層に多く見られる。生活習慣の変化に伴い、若者や中高年層とは屋外活動の種類が見られる。

### IV ボイラーハウスが持つ可能性

1950年代 1980年代 2020年代

ボイラーハウスの可能性

ボイラーハウスの可能性

### V 選定地

G: 大連理工大学東山ボイラーハウス

大連理工大学 (沙河口) の敷地内にあるボイラーハウス。現在は大学キャンパスと周辺団地を一体的な熱供給が行われてきた。2013年からこのボイラーハウスの利用も停止となった。地域住民は大学構内に入ることではあるが、学生とのつながりは少ない。かつてボイラーハウスの熱供給範囲を計画地としていた。

### VI 提案: 屋外コモンズの継承と再構築

ボイラーハウスに着目し、3つの視点から屋外コモンズを再構築する。

「場」: ボイラーハウスを屋外活動の中心に

「人」: 大学生と団地住民を繋ぐ屋外ビジネス

「生活インフラ」: ボイラーを共有資源に

利用されていないボイラーハウスを自由な屋外活動の中心点へと再構築し、キャンパスと団地の新たな融合を図る。かつてボイラーハウスから周辺地域へと熱を送っていたように、拠点を中心に屋外活動が広がっていく。

大学生と団地住民の交流の中で、新たな屋外活動が発生する。屋外活動の中心となるビジネスを通して屋外の大規模な活動を実現し、屋外コモンズを成長させていく。

ボイラーハウスを共有資源に活用し、団地とキャンパスの間に新たなつながりをつくる。ボイラーハウスの一部をビジネスとして活用し、4つの小ボイラー拠点を地域に分散配置する。それらを団地とキャンパス間で共有することで、私的な生活での開け合いを屋外に広げる。

### 大連理工大学ボイラーハウス「東山自在中心」

GL+2000 平面図 1/300

GL+6000 平面図 1/300

ボイラーハウスの構造を継承し、新しい用途に合わせて空間を再構築する。

ボイラーハウスの構造を継承し、新しい用途に合わせて空間を再構築する。

ボイラーハウスの構造を継承し、新しい用途に合わせて空間を再構築する。

### 建築操作

- 工業遺産としてのボイラーハウスの建築的特徴の保存・活用
- 屋外空間のニーズによって、それぞれのニーズに
- 人の目線で感知できる街の風景を再構築

### 地域計画

東山自在中心 (ボイラーハウス)

A. サウナ広場

B. 芝生広場

C. 読書広場

D. 有蓋広場

E. 小ボイラー広場

F. 小ボイラー広場

G. 小ボイラー広場

H. 小ボイラー広場

I. 小ボイラー広場

J. 小ボイラー広場

K. 小ボイラー広場

L. 小ボイラー広場

M. 小ボイラー広場

N. 小ボイラー広場

O. 小ボイラー広場

P. 小ボイラー広場

Q. 小ボイラー広場

R. 小ボイラー広場

S. 小ボイラー広場

T. 小ボイラー広場

U. 小ボイラー広場

V. 小ボイラー広場

W. 小ボイラー広場

X. 小ボイラー広場

Y. 小ボイラー広場

Z. 小ボイラー広場

# 枯れた里山 芽吹く声 -ナラ枯れ材を核として未来へ紡ぐランドスケープ-

田中慶人、松下敦紀、宮田耕太郎 (栗山研究室)

ニュータウン、農村、山の人それぞれが持つ里山に対する認識を変え、街に森が浸透していくように里山とのかかわり方を再構築する。そこで、山に置き去りになったナラ枯れ材を活用し、三者それぞれが交わっていきけるような拠点を農村部と山間部の中間地点につくる。ナラ枯れ材のウッドチップを道に敷き詰めながら、仲間と共に木を植える。このようにして、近寄りがなくなった山へとつながる入口となるような第2の里山を創出し、里山の循環の礎となる拠点を築いていく。



## 枯れた里山 芽吹く声 -ナラ枯れ材を核として未来へ紡ぐランドスケープ-

01 敷地 兵庫県神戸市北区有野町下唐櫃地区 02 課題 里山という意識の薄れ 03 現状 人が入らなくなった里山で起こっている問題 04 提案 里山意識を再構築する 05 プログラム 子供を核に紡ぐコミュニティと里山の循環

**01 敷地** 兵庫県神戸市北区有野町下唐櫃地区

対象敷地は兵庫県神戸市北区有野町である。この場所は東六甲にある住宅街に囲まれた場所で、周辺には六甲山の山並みがそびえている。豊かな自然環境とニュータウンとして開発された唐櫃台の住宅街が隣接している。

裏山と村とを結ぶコミュニティ

山を管理する林業関係者は存在するが、高齢化や新規加入者の減少により、組合員数の減少などの懸念があり、組合所有の森林の整備の方向性が定まらず、山に置き去りにされている。

下唐櫃における里山

里山の豊かな木々が多くを占める。雑木林のなかでもナラやコナラなどの広葉樹が広がっている。

**02 課題** 里山という意識の薄れ

かつては山に入り、道具を手にして間伐し、薪材用の木として雑木林を管理していた。山間部において切り捨てられた山は、自分たちの里山であるという意識が薄れている。

1955-

唐櫃台ニュータウン 農村 里山

ニュータウン開発が進み、ニュータウンと農村部では人々の関係性が弱くなる。自然に雑木林を管理する文化も薄れていくことで、この地域の住む人々の心にとって、里山という意識も薄れていく。

**03 現状** 人が入らなくなった里山で起こっている問題

ナラ枯れ材

ナラ枯れ材はもともと自然に朽ちては消滅する。しかし、山に置き去りにすることで自然に朽ちては消滅しない可能性がある。

**04 提案** 里山意識を再構築する

ニュータウン、農村、山の人それぞれが持つ里山に対する認識を変え、街に森が浸透していくように里山とのかかわり方を再構築する。そこで、山に置き去りにされたナラ枯れ材を活用し、三者それぞれが交わっていきけるような拠点を農村部と山間部の中間地点につくる。

ナラ枯れ材のウッドチップを道に敷き詰めながら、仲間と共に木を植える。このようにして、近寄りがなくなった山へとつながる入口となるような第2の里山を創出し、里山の循環の礎となる拠点を築いていく。

**05 プログラム** 子供を核に紡ぐコミュニティと里山の循環

使う、育てるの循環

活用 育てる 育てる 育てる

小・中・高生 木育 雑木林 林業関係者

循環を見守る

多様化する職種、活動を内包する

林業だけでなく、第二の働き方を求める人が増えている。仕事、打ち合わせの場になるササライオアを運営してはたかコミュニティとの交流を促す。「住む人」と「働く人」をつなげる

コミュニティの場

人との関係が深まり、ニュータウンに移り住む人と共に住む人、人に対する関心が高まっている。人が集まることで、住んでいく人、移り住んでいく人、関係なく共に生きて、交流が生まれる。



[担当教員]

所属研究室教員（主に末包伸吾(教授) 槻橋修(教授) 浅井保(助教)）

開講年次：博士課程前期過程1年生第1クォーター

■課題概要

NEXT21は1994年に居住実験をスタートした大阪ガスの実験集合住宅です。20世紀末にあつて、次の21世紀を名に冠して未来のことを考える取り組みでした。しかも単に一時の未来予測を提案するだけでなく、実際に住むことで実証実験を重ねて次々と新しい未来像に挑戦してきた継続的なプロジェクトでもあります。それらはたとえば多様な家族形態にあわせた間取りなど、少し先を見据えた実験の繰り返しの日々でした。それらが連なることでもっと先の未来に届くような結果を期待して。

そして30年、プロジェクトを俯瞰することができる年月が経過してきました。その履歴をうけとめて、さらに先に進みたいと思います。NEXT21は20世紀末に描かれはじめた未来ですが、21世紀の今、さらに22世紀にトスするために考えなくてはいけないことが山積みです。たとえば主としてNEXT21の住棟内で行われてきた活動を近隣や地域を巻き込んで続けていきたいし、さらに先には地域を飛び越えて広がっていくことも考えたい。建築のハード面だけでなく、イベントを開くなどのソフト面での提案もしていきたい。あるいはもっと場所をシェアするようなあり方もあるかもしれない。AIやシミュレーションなどの技術面でも更新が必要な場合が出てくるはず。それらを多くの方々と一緒に考えたいと思っています。

30年経ったのですから、50年もそれほど先の未来ではありません。あるいは100年も。大袈裟に言えば、NEXT21は「人類にとってどのような価値をもっているのか」という大きな課題を考える段階に至っているという意気込みでとらえれば、人類全体の建築と比べた時にどのような価値をもち、そのことによってどのような役割をもっているものなのかを長い射程で考える素地ができてきたものと考えてみることもできるかもしれません。それを踏まえて、NEXT21をさらなるNEXTへ。

■条件

NEXT21の未来を提案してください。どれくらい先の未来を想定するのか、あるいはどのような未来を描くかは自由に設定していただければと思います。たとえば、地域へ開く仕組み、長く使われる住まい方や空間、さらに緑と共生する姿など自由な発想で提案してください。

対象範囲は建物全体または範囲を限定した提案でもかまいませんが、限定した場合においても共用エリア(1階～2階)と住居階(2～6階)を提案してください。

住居階については1フロアでも複数フロアでもかまいません。ただし、住戸単体のみの提案は不可です。

■建物概要

地上6階、地下1階、共同住宅18戸

■提出物

PDFデータ(A1サイズ:594×841mm/片面/横/10MB以下)1枚に下記の内容をまとめてください。

使用言語は日本語または英語とします。

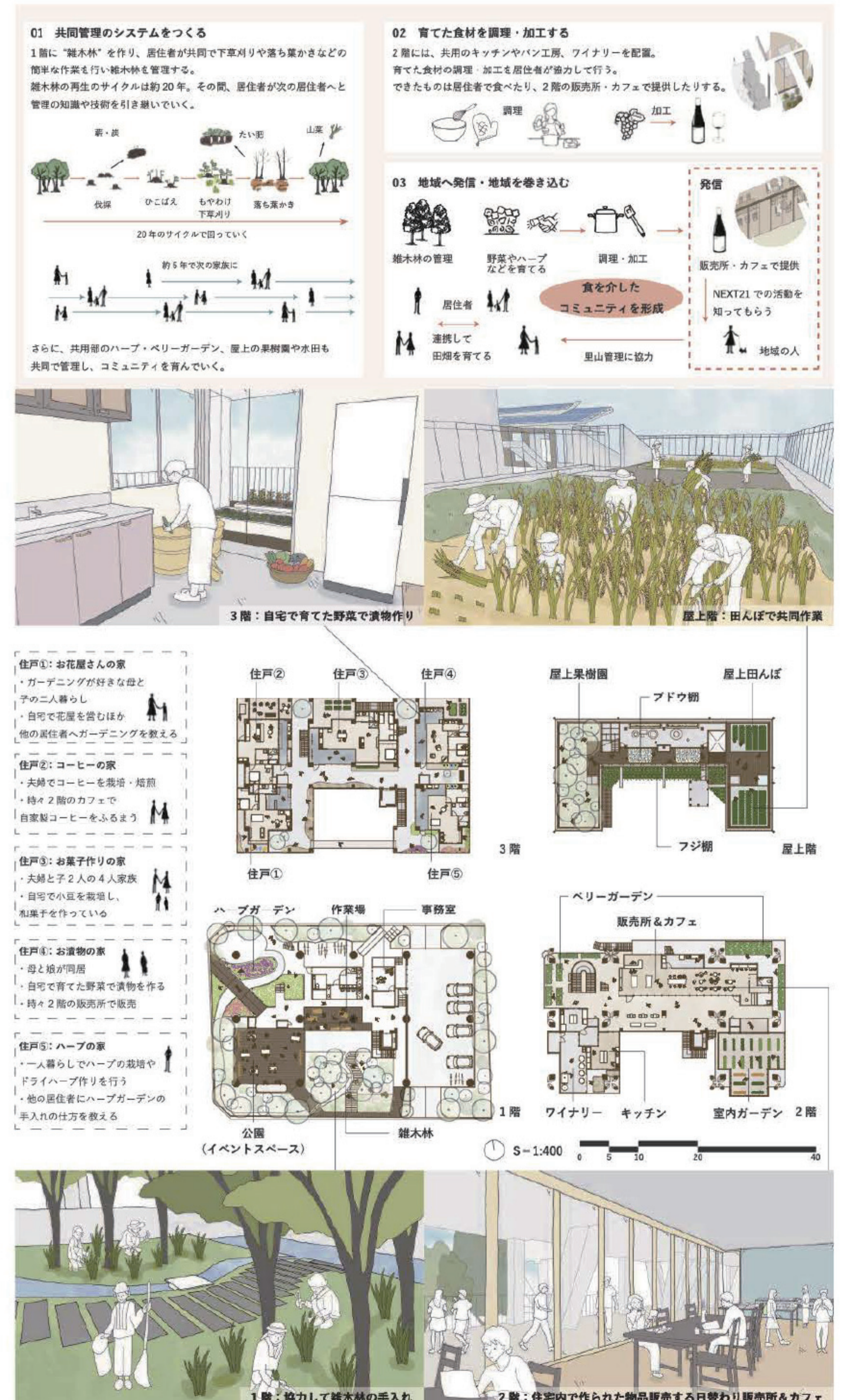
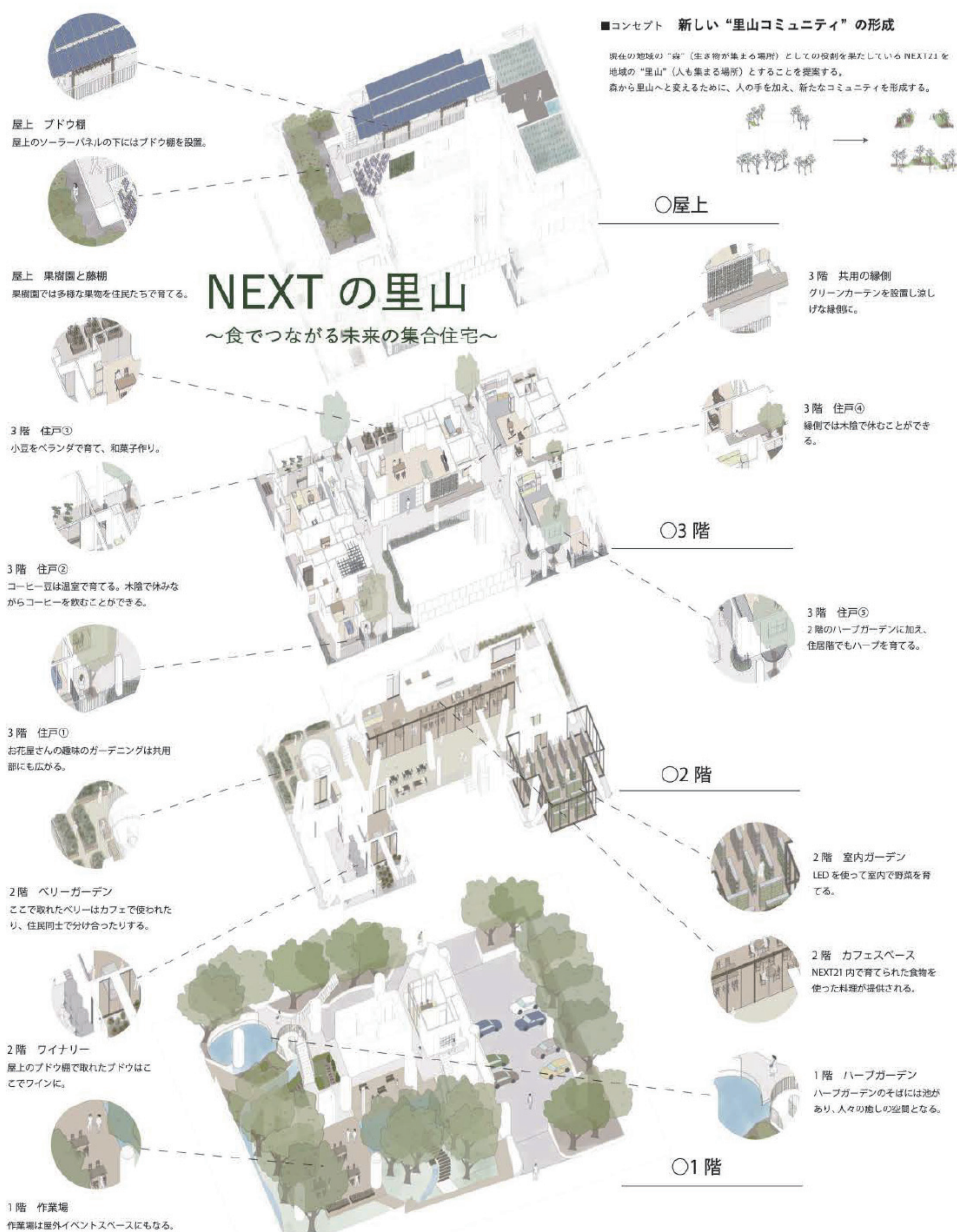
- (1) 設計趣旨
- (2) 平面図、断面図、展開図など設計趣旨を表現する図面(図面には必ず縮尺を記入)
- (3) その他パース、模型写真、CGなど設計意図を伝えるもの(表現は自由です)

\*以上の文章は大阪ガスHP

(<https://www.osakagas.co.jp/company/efforts/next21/30th/competition/>) から引用

NEXTの里山 ー食でつながる未来の集合住宅ー

徳山さき、神前由佳、矢野真佑奈(栗山研究室)



# 18 設計演習特論 B

## サステナビリティのその先へーバイオフィリックな環境の提案ー

[担当教員]

末包伸吾（教授）槻橋修（教授）浅井保（助教）

### ■課題の背景と目標

#### (1) 近代批判としての持続可能性と現代建築

大量生産・消費を旨とした近代社会への警鐘の中で、最も重要な課題に持続可能性がある。1970年代からの持続可能性という課題の提起は、近代建築への批判としての現代建築の展開と期を一にし、近代批判という点での共通項を有する。現代においてSDGs等の持続可能性に係る指標等が示されはするが、それらはいくまで環境保全を旨とする物的な指針にとどまる。すなわち、持続可能性という概念を、現代の環境創造における本質的な課題とし、その概念規定や実践・成果についての十分な検証がなされているとは言い難い状況にある。

#### (2) 持続可能性への批判・検証からバイオフィリック・デザインへ

現在の持続可能性は、基準等が環境保全を旨とした物的な指針を主とする狭隘な許容範囲に批判がなされる。持続可能性を重視した環境創造にあっても、人々がその人工環境にいかに関心するののかという問題が残存し、人工環境が人間の幸福・健康に寄与できるのかという点が論点とはなっていないのである。この人工環境と人間の心理的・生理的な側面との関係を問い実践するのがバイオフィリック・デザインである。

#### (3) 近代建築から現代建築へバイオフィリック・デザインの実践へ

近代建築は標準化を重んじ地域性を廃した建築表現を志向したとされ、環境との呼応が重視される現代建築では批判される。K. フランプトンは、国際的な文明と国民的な文化との融合、普遍的な文明の中に身を置きながら、いかにして個別的な文化を持ちうるのかと提起し、それを重視する後衛主義こそ現代建築の進むべき道とした。

以上の1) から3) をふまえ、本課題では、バイオフィリック・デザインとしての「環境創造」の可能性の開示を、具体的な設計提案として提起することが求められる。

5W1H（When：いつ、Where：どこで、Who：だれが、What：何を、Why：なぜ、How：どのように）の全項目を課題作成ユニット（個人課題でもグループ課題でも可とする）ごとに設定し提案を作成する。各項目の設定及びその相関、環境としての統合における明晰で説得性のある提案が強く求められる。これ以外の設定は各自に委ねられる。積極的な参画を望む。

### ■スケジュール

6月27日（木）：チェック1＝5W1Hの設定及びファースト・スケッチ

7月11日（木）：チェック2＝5W1Hのより高度な設定と構想案

7月25日（木）：チェック3＝エスキース・チェック

8月01日（木）：講評会

\*設計演習特論 A において課題 2 を選択した者で2次審査に進出した場合、B 課題として扱う。



最終講評会の様子



# 雪しろ水は廻りゆく

宇野耀士、柳内あみ（末包研究室）、山口沙礼、XUE XIAOYI（槻橋研究室）

断熱材や空調設備の進化に伴い土地固有の自然環境を活かした暮らしが失われつつある現代。夏の酷暑、冬の豪雪という自然環境を有す兵庫県豊岡市を敷地とし、かつて人々の滞留空間であったあおぞら市場の改修を通して、古来の雪室の知恵と豊岡の水資源を活かした空間を構築する。



## 雪しろ水は廻りゆく

古来の知恵を生かした季節を越える暮らしの再考

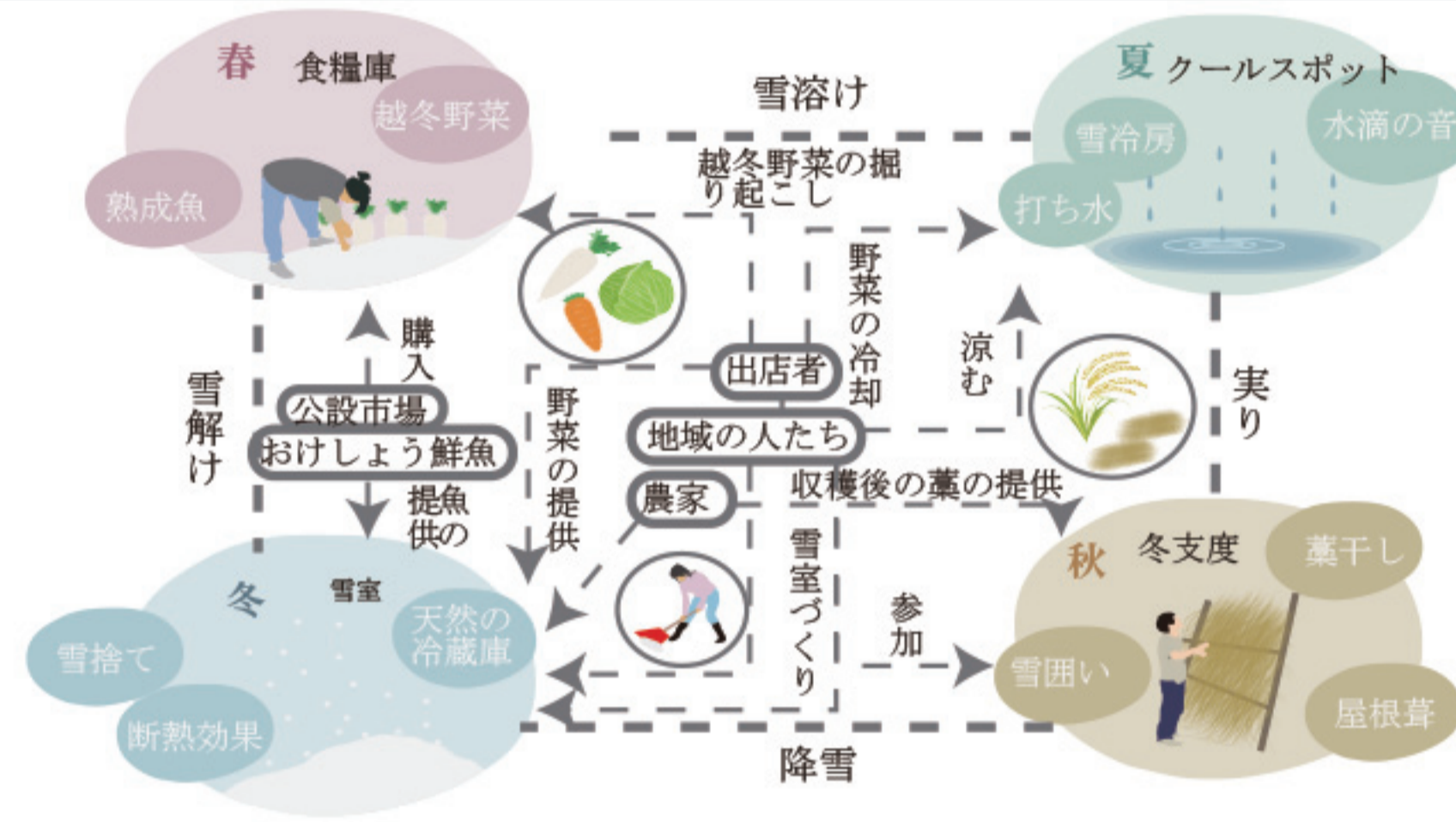
断熱材や空調設備の進化に伴い、土地固有の自然環境を活かした暮らしが失われつつある現代。夏の酷暑、冬の豪雪という自然環境を有す兵庫県豊岡市に着目し、地の恵恩を享受した暮らしを再考する。地下に水路があり、かつては人々の滞留空間として活用されていたあおぞら市場の改修を通して、古来の「雪室」の知恵と土地固有の「水資源」を活かした空間を構築する。地域住民が五感を通して「水」の恵恩を享受できる建築を目指す。

### 1. 建築の変化

空調設備、断熱材の発達の影響

	夏	冬	特徴
従来			自然を選択的に取り入れた自然と共生した建築
現在			内に閉じ、身体感覚が均一化された建築

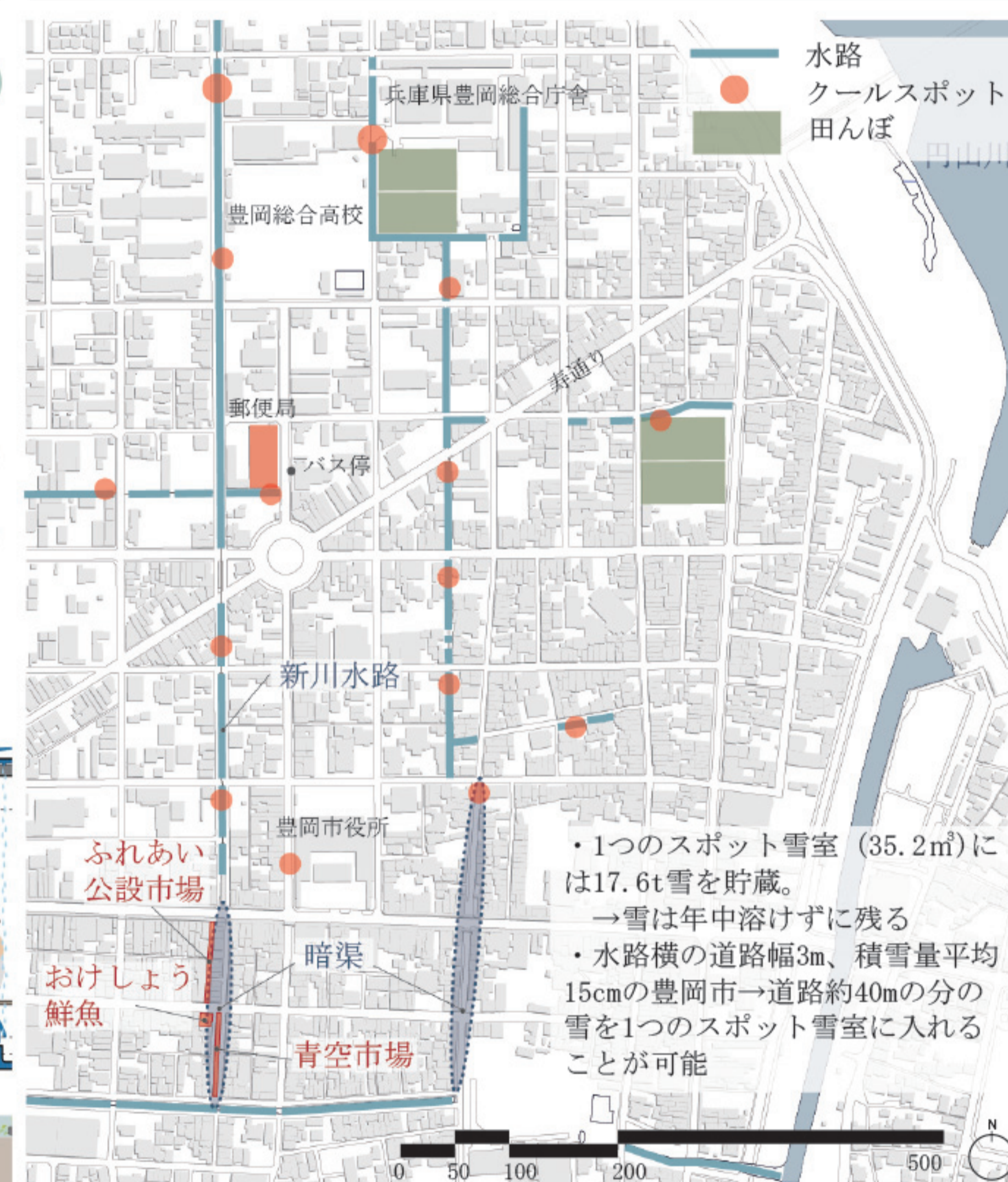
### 2. 地域の人と水の関係性



古来の知恵：雪室

### 4. スポット雪室の広がり

街中の水路の活用



### 3. 提案

